

現在、入隊時の戦友会は「オサラッペ会」と云い、月例会や忘年会、新年会などを開催して、既に二十三年の歴史がありました。

陸軍船舶兵として

神奈川県 今井 富清

私は愛知県幡豆郡吉野町富好三六番地の今井家の長男として生れ、兄弟は無く一人子でした。家は廻船問屋を営み、常時二人の雇人がいて、主として三河湾で荷物の運送業をしていました。吉良尋常高等小学校を卒業すると早速家業の仕事を手伝い、父と私と雇人二人の四人で、一二〇トン級の貨物船二隻で運搬業をしていました。主に瓦や煉瓦等を積んで運んでいました。

昭和十(一九三五)年七月、本籍地の愛知県幡豆郡吉田町(現在吉良町)の小学校講堂にて徴兵検査を受け第一乙種合格となりました。そして昭和十二年七月二十七日支那事変が勃発、世相は慌ただしくなり、あちらこちらから応召兵の出征する姿が見えるようになりました。私も覚悟はしておりましたところ、同年十月十三日赤紙の召集令

状がきました。当時の出征兵士は一家の名誉であり、町内の名誉でもあるので、近所の方々や役場の方々におめでとうございませと励まされて門出をしました。

同年十月十七日、静岡県三島市の野戦重砲隊に入隊致しました。早速編成され、私は静岡県出身の陸軍工兵中尉が隊長の伴野隊に編入となり、当夜の宿泊は三島市内に割り当てられた民家のお世話になりました。翌朝午前八時、重砲隊の練兵場に整列、ここで新品の軍服の上着、袴、編上靴、ゲートルや、その他の装備品の数々も全部新品だったのには驚きました。軍衣の肩章には星が一つ着いておりました。

日露戦争の生き残りの父は、昔は輜重輸卒でしたが、その父は俺の子供だから輜重輸卒が適材適所だろうと、私が子供の頃から笑っていました。私も地下足袋でもはいて、何か運搬でもするぐらいに考えていたので、軍服に星一つついているのには吃驚仰天、天に昇る思いでした。

各自に装備品などの支給が終了して、民宿で待機の命があり、急いで宿舎に帰って「ただいま」と玄關を開けると、家中の人達が出迎えて下さいました。今日は朝から良いことばかりで、頭が変になっていたのか、あるいは嬉しさのあまりか、突然涙がいっぱいでも何にも見えなくなりました。その晩は同宿させて戴いた三人に尾頭付のお魚などの御馳走でおもてなしをして下さって、感謝感激で胸が一杯でした。お礼に親父が唄った昔の輜重兵が唄ったという唄を大きな声で歌いました。

「輜重輸卒が兵隊ならば、蝶々トンボも鳥の内」
「輜重輸卒が兵隊ならば、電信柱に花が咲く」と、この二つの唄の意味も今は知る人も少ないことでしょうが、私には一生忘れ去ることのできない思い出です。

昭和十二年十月十九日、いよいよ戦地への出発命令となりました。入隊の時大変お世話様になった皆様、役場の方々等にご挨拶も出来ず、早朝の列車で広島の宇品港に向かって勇躍出発致しまし

た。同日広島に到着、宇品第一船舶隊に配属となりました。入隊前に私は船舶の仕事をやっていたためでしょう。

昭和十二年十月二十日、広島市内の幟町小学校に集合、宇品行のトラックの来るのを待っていました。正午頃やつと我々を乗せたトラックは宇品の兵舎に到着しました。翌日から軍服を白の作業衣に着がえて、小さな舟艇の清掃やら手入れ等を行いました。このような小さな舟艇は、中国のクリークや湖を自由に走れるように造られた五トンか八トンぐらいの木造船でした。ヤンマーディーゼルの動力機が付いていて、スピードも五、六ノットぐらいは出たと思います。

宇品に着いて一週間ぐらい過ぎた頃でした、全員集合とのことで急いで営庭に整列しましたら、「兵員三百人の内二百五十人は明日上海に向け出発する。残り五十人は残留。今から名前を呼ぶから呼ばれた者は隊列を離れて別な場所へ集合」と命令されました。次々と名前が呼ばれ、私もその

思いましたが、隊長殿より陸軍の船舶兵であると言われていたので気持ちを引締め、頑張る覚悟を致しました。

昭和十二年十一月某日、私達もいよいよ戦地に出発となり、宇品港より大阪商船(御用船)「波の上丸」にて上海に上陸、昭和島陸軍中支船舶司令部(桜井中将)伴野隊に配属となりました。我々船舶隊の任務は友軍の各種部隊を進撃する際、クリーク、湖あるいは河川等を船舶にて輸送することが大事な役目であったのです。

連日訓練を行っていたある日のこと、あるクリークで操縦訓練中、一人の戦友がクリークに転落してしまいました。十二月でしたので真冬の寒さ、私は直ちに水中に飛び込み救出し無事でしたが、着たまま飛び込んだのでずぶぬれ、その時は寒さも忘れて無事に救出できた喜びでいっぱいでした。今その日時は思い出せませんが人命救助をした訳です。

昭和十三年二月、肩の星も二つになりました。

内の一人となったのです。今行くも残留も遠からず戦地へ行くものと覚悟はしておりました。残留組の隊長が杉浦分隊長であったこと、戦友が同郷の同年齢の人だったので仲よくやれるなど思っ

て安心しました。その日から自分達が使用する舟艇の当番を定められました。後で分ったことですが、今度残った五十人の内四人は、召集される前は船舶関係の仕事をしていて、しかも船舶の免許を持っている者として、残留者の残り四十六人に対しての指導者となったのです。私も指導者になった訳ですが、私なんかは機帆船の免許で、これは誰でも簡単に取得出来るものですが、指導者ともなれば、たとえ星一つでも上級者、古兵と言えども操縦技術面においては教育する立場となった訳です。

子供から自分の家の持船の伝馬船に友達を乗せて櫓や櫂を操って、毎日のように遊んで大きくなった身には、小さな舟艇などは、伝馬船を操るようなものでした。船舶兵と言われた時、海軍かと

伴野隊長が戦病死されてしまったので、私は船舶司令部港務課勤務となりました。内地からの諸物資の輸送業務でした。

昭和十四年八月、星も三つの上等兵に進級しました。そして昭和十四年十二月二十九日、上海において満期除隊となりました。

昭和十四年十二月三十日、日本郵船会社に入社して、上海揚樹浦石馬頭勤務となり、中国安徽省にて食糧物資等の買い付け業務を現地で行っていました。主に軍関係に納めておりましたが、当時は戦争の最中で、買い付け業務も危険な場合も幾度かありましたが、昭和二十年八月の終戦となり、上海の今井洋行出張所にて帰国船を待っていました。

翌昭和二十一年三月二十一日、博多港に引き揚げ帰国し、本籍地の愛知県幡豆郡吉良町富好の自宅に帰宅することができました。

十年振りで懐かしの我が家に帰ったとは言え、自宅は戦災から免れたのですが、近くの工場や建

物は爆撃で破壊され、まだ復興はしていない惨めな光景をしていました。

帰宅して驚いたのは昭和十五年頃とのことですが、父の許に「勲八等旭日章」が届けられていたのです。私は軍隊在職中は司令部勤務であり、また除隊後は現地で買い付け業務等をやっておりましたので、軍に関する写真や、その他の資料も種々持っておりました。しかし蒋介石軍や八路軍等の持物検査の際にすべて焼却処分をしてしまいましたので、当時の事情に関する資料は有りません。また現在、高齢の身となり、七十年前の記憶もうすれてしまいました。